

平成19年12月6日

報道関係各位

日本女子大学

「第三回 平塚らいてう賞」 受賞者決定

～顕彰（1件）「上村千賀子氏」、奨励（1件）「齋藤慶子氏」～

人権週間でもある12月6日（木）、日本女子大学は研究者・学生の顕彰・奨励を目的とした「第三回平塚らいてう賞」の受賞者を発表しましたので、お知らせします。

「平塚らいてう賞」は、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏（1906年日本女大卒業）の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対する顕彰と奨励をはかることを目的に平成17年に創設したものです。

本年は顕彰1件、奨励1件の応募があり、厳正な審査の結果、両名とも受賞に値することが決定しました。受賞された方々を以下にご紹介します。

■ 受賞者

1. 顕彰（1件）上村千賀子氏
（独立行政法人国立女性教育会館客員研究員）
2. 奨励（1件）齋藤慶子氏
（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達科学専攻）

なお、贈賞式は、2008年2月9日（土）14時より、日本女子大学 新泉山館において行います。

<選考委員>

- | | |
|-------|---------------------------|
| 後藤 祥子 | 〔日本女子大学学長〕 |
| 中畠 邦 | 〔平塚らいてうの記録映画を上映する会会長〕 |
| 杉森 長子 | 〔WILPF（婦人国際平和自由連盟）日本支部会長〕 |
| 羽田 澄子 | 〔映画監督〕 |
| 出淵 敬子 | 〔WILPF（婦人国際平和自由連盟）日本支部会長〕 |

（この件に関するお問い合わせ先）

日本女子大学 広報渉外課内 平塚らいてう賞事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
TEL：03-5981-3176、FAX：03-5981-3164
Eメール：raiteu@atlas.jwu.ac.jp
HP : http://www.jwu.ac.jp/raiteu

「第三回 平塚らいてう賞」選考委員発表コメント

第三回受賞者の選考にあたり、私どもは、候補者の業績を広く、世界の女性のさらなる解放、問題の解決、平和問題や地域社会への公正な目配りと着実な行動の継続という観点から論議し、以下の諸業績に対して、「顕彰」と「奨励」に値するとの結論に達しました。それぞれのご業績の特色や褒賞に値する観点は下記の通りです。

< 顕 彰 >

受賞者：上村 千賀子氏（独立行政法人国立女性教育会館客員研究員）

本年度の「平塚らいてう賞」顕彰部門は、上村氏の『女性解放をめぐる占領政策』に授与されることとなった。本書は、平塚らいてうがめざした「女性解放」という歴史課題に真正面から取り組んだ研究の成果である。

上村氏は、日本女子大学卒業後、東京大学大学院に進み、1978年、国立婦人教育会館に勤務され、女子教育研究に携わる他、幅広く社会教育活動をされ、1997年から群馬大学で、ジェンダーと生涯学習に関する授業を担当される傍ら、ジェンダーおよび戦後の女性政策の研究を進め、『アジア・太平洋地域の女性政策と女性学』、『女性学教育／学習ハンドブック』、『ジェンダーと社会教育』、『現代的人権と社会教育』、『女性解放をめぐる占領政策』など研究成果を次々発表されて来た。本書は、氏の研究を集大成したものと言えよう。

本書の優れて評価されるべき点は、視点の斬新性と論点の実証性である。戦後60年余を経た今日、占領政策や終戦時の事象に関する様々な論調が表れ、その都度、「真実は何か」が多くの人々の関心事となった。戦後日本の社会変容における最重要事の一つは、男女平等を謳った日本国憲法の制定であり、それにより、「女性解放」は市民運動というよりも、政治や社会の常識として日本人の目の前で実現したという事実である。本研究は、この点を注目しつつ、その実現過程をアメリカの占領政策に焦点を絞り、占領期の政策決定過程を最新資料を駆使し精査している。鋭い探求心をもって、氏は散逸している資料の収集および新たな資料発掘の成果により、課題の新局面を実証している。日本の男女共学実現や労働省婦人少年局成立過程とも照合し、日米双方の視点を重視し、交差する諸問題を解明し、戦後日本の女性の地位向上に不可欠な課題、労働や教育における男女平等の実現を実証する上で際立った成果をもたらした。国境を越えてなされた氏の研究成果こそ、そのパイオニア性ゆえに「らいてう賞」の顕彰部門の授与に余りある研究であり、著書であろう。

< 奨 励 >

受賞者：齋藤 慶子氏（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達科学専攻）

本研究は研究テーマに関連する先行研究が主として小学校女性教員大会の議論の理念的研究に留まることを踏まえ、より各地域の女教員の実態にせまり、本課題を究明することを意図している。対象時期も従来あまり触れられていない、総力戦期から、戦後の1947年に至るまでを目標とし、研究への意欲が見られる。

さらに、近代日本の後半により強調されてくる「母性」イデオロギーが、女性教員の職業と家庭の両立問題にどのように反映するかを追究し、地域によって重点の置き方が違っていることを実証しつつあり、注目

される。

今後の研究も女教員大会の検討などとあいまって、全国的な地域の事例研究をさらに進め整理しながら、同時に本課題の分析方法の構築をはかり、現代の女性教員の支援につなげたいとしている。

平塚らいてうには「母性」への重視があり、本研究は奨励賞にふさわしい成果があることが期待できる。

以上